慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラングとテクストの意味論
Sub Title	Une sémantique de la langue et du texte
Author	喜田, 浩平(Kida, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.2 (2021. 12) ,p.143- 154
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	荻野安奈教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210002-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ラングとテクストの意味論

喜田　浩平

はじめに

言語記号のシステム（すなわち「ラング」）を意味的に記述する研究領域は「意味論 la sémantique」と呼ばれる。本稿の筆者が依拠する理論的枠組み「意味ブロック理論la Théorie des Blocs Sémantiques」（以下TBS）は意味論のアプローチの一つである。その主要な目的は語や句、構文の意味をラングのレベルで記述することにある。ところで、TBSの手法を用いたラングのレベルでの意味記述が、テクストのレベルでの事象を説明することに貢献する場合がある。これは、TBSの方法論の根幹に「ラングをディスクールで記述する」という独創的な側面があるからに他ならない。

以下では、筆者が今までに発表した研究の中からテクスト解釈に関係するものを選び総括を試みる。そのようなプロセスを経て、個別研究では見えにくかったTBSのテクスト分析の可能性を明らかにしたい。

TBSの基礎概念

言語と世界、言葉と物の関係を「指示référence」と呼ぶ。アンスコンブルとデュクロの「ラングに内在する論証」理論（la théorie de l'argumentation dans la langue）は指示を言語の本質とみなす意味論の限界を示し、「論証的な方向性 orientation argumentative」を意味記述の中心概念とした（Anscombre et Ducrot 1983, 1986)。カレルが提唱するTBSはこの方法論を継承し発展させたものであ

る（Carel 2011a, 2011b, 2012, 2017, 2019）。以下ではKida (2021)を中心にその基礎概念を概観する。

まず言語表現の意味は「論証連鎖enchaînement argumentatif」によって明示される。これは論証的な構造をもつ最小限の「ディスクールdiscours」である。例えば発話(1)の意味は、ある文脈では論証連鎖(2)によって明示され、別の文脈では論証連鎖(3)によって明示される。

(1) Max est prudent
マックスは慎重だ

(2) *Max est prudent donc il n'aura pas d'accident*
マックスは慎重なので事故は起こさないだろう

(3) *Max est prudent pourtant il a eu un accident*
マックスは慎重なのに事故を起こした

一般に「論証的」と呼ばれるディスクールはdoncやparce queなどの接続表現によって構成されるが、TBSではbien queやpourtantによるものも同様に「論証的」と呼ぶ。ある表現の意味がある論証連鎖によって明示される場合、表現が論証連鎖を「喚起するévoquer」と言う。

論証連鎖を一般化・抽象化したものが「論証スキーマschéma argumentatif」である。これは論証連鎖の前半と後半の中心的な述語のみを取り出し、主語や目的語、時制や叙法、接続表現の個別性を捨象した「骨組み」のようなものである。論証スキーマはスモールキャピタルで表記される。接続表現doncやparce queはDCと表記され、bien queやpourtantはPTと表記される。また、論証的に否定的方向性をもつ表現（ne...pas、peu、rarementなど）はNEGと表記される。上記(2)と(3)をそれぞれ一般化したものが論証スキーマ(4)と(5)である。論証連鎖は論証スキーマを「具体化するconcrétiser」と言われる。

(4) PRUDENT DC NEG ACCIDENT

(5) PRUDENT PT ACCIDENT

発話(1)は別の文脈では論証連鎖(6)を喚起することもあり、(6)は論証スキー

マ(7)を具体化したものと考えられる。

(6) *il y avait du danger donc Max a pris des précautions*
危険があったのでマックスは用心した

(7) DANGER DC PRÉCAUTION

TBSではこのようにして特定された論証スキーマが言語表現の意味を構成すると考える。形容詞prudentの意味は論証スキーマ(4)(5)(7)によって記述される。

論証スキーマについて2点補足しておく。まず「ギャップdécalage」の概念について（Carel 2011b）。論証スキーマが論証連鎖によって具体化される場合、一方ではスキーマの述語がほぼそのままの形で論証連鎖の一部に用いられる場合がある。上記の例はすべてこのケースであった。しかし他方で、論証スキーマの述語がそのままの形ではなく個別化されたり例示化されることで具体化されるケースもある。このような場合、スキーマと連鎖の間に「ギャップ」が生じるとされる。例えばMaxが山登りをしている状況で、発話(1)が論証連鎖(8)を喚起すると仮定しよう。

(8) *il a plu donc Max est rentré*
雨が降ったのでマックスは引き返した

この論証連鎖も論証スキーマDANGER DC PRÉCAUTIONを具体化したものと考えられる。しかしスキーマの述語がそのままの形で具体化されていない。ここには「ギャップ」が生じ、pleuvoirとrentrerはDANGERとPRÉCAUTIONの個別例として解釈される。

論証スキーマに関するもう一つの補足事項は「意味するsignifier」と「予示するpréfigurer」の区別である。ある言語表現に論証スキーマが単独で固定的に結びつく場合、表現がスキーマを「意味する」と言われる。形容詞prudentは単独の論証スキーマDANGER DC PRÉCAUTIONを意味する。しかし論証スキーマPRUDENT DC NEG ACCIDENTおよびPRUDENT PT ACCIDENTは事情が異なる。形容詞prudentはこれらのスキーマのどちらか一方だけを個別に単独で意味するのではない。2つのスキーマが一体化したもの、その二者択一性を意味する。このような場合、形容詞prudentはそれぞれのスキーマを別々に「予示する」と言われる。ある表現が2

つの論証スキーマを予示する場合、話者はその表現が意味する二者択一性に基づいて発話を構築することもあれば、表現が予示するどちらか一方のみを選択する場合もある。

条件文

Si X, Yの形式で「もしXならYである」と理解できる文を「条件文énoncé conditionnel」と呼ぶ。Kida (1998)は条件文のさまざまな性質を初期のTBSの枠組みで記述した。以下ではその概要を紹介し、場合によっては上記のような新しいTBSの概念を用いて再解釈を試みる。

フロイトの『機知の言葉』に次のような笑い話がある。馬喰と客の会話である。フランス語訳から引用し、フランス語のテクストとして分析する。

> Si vous prenez ce cheval et si vous partez à quatre heures du matin, vous serez à six heures et demie à Presbourg. — Et qu'est-ce que j'irais faire à Presbourg à six heures et demie du matin ? (Freud 1988 : 119)
> この馬に乗って朝4時に出発すれば、6時半にはプレスブルクに着きますよ。
> —プレスブルクでいったい何をするんだい、朝の6時半に。

馬喰の発言は条件文の形をとっている。そしてこれが2重に解釈される点がユーモアを生み出している。馬喰の意図は馬を褒めることであろう。これに対し客はそのような意図に気づかず（あるいは気づかないふりをして）馬喰の発言を異なる意味に理解している。馬喰の意図する意味と客の理解する意味の食い違いをどのように説明するかが一つのポイントである。

もう一つのポイントは、そのような食い違いが条件文とどのような関係にあるかを説明することである。つまり条件文の記述というラングレベルの問題から、笑い話の解釈というテクストレベルの問題をどのように橋渡しするかという問題である。

条件文には少なくとも2つの用法を区別できる。ここではKida (1998)の主張をふまえつつ、上述のようなTBSの新しい枠組みを用いて類型化する。第1の用法は以下のように記述できる。

(i)　条件文si X, Yが論証連鎖Zを喚起する
　　ZはYが予示するスキーマを具体化する

例えば条件文s'il fait beau, Pierre viendraがあるコンテクストで論証連鎖*Pierre viendra donc je vais lui préparer un repas*を喚起する場合、この論証連鎖はスキーマPRÉSENCE DC BON ACCUEILを具体化したものと考えられる。そしてこのスキーマは条件文の後半部分（より厳密には動詞venir）が予示するものである。

条件文の第2の用法は以下のように記述できる。

(ii)　条件文si X, Yが論証連鎖Zを喚起する
　　Zは条件文の外部にある表現Pが意味するスキーマを具体化する

例えば条件文si je bois du lait, je suis maladeがあるコンテクストで論証連鎖*Je bois du lait donc je suis malade*を喚起する場合、この論証連鎖はスキーマPRENDRE DC MALADEを具体化したものと考えられる。そしてこのスキーマは形容詞allergiqueが意味するものである。この語は条件文そのものには含まれない。

フロイトのテクストではこの2種類のタイプが活用される。馬喰は条件文を(ii)のタイプとして利用する。まず条件文が論証連鎖*vous partez avec ce cheval donc vous arriverez en peu de temps à Presbourg*を喚起する。これはスキーマDÉPART DC NEG TEMPS POUR ARRIVERを具体化したものと考えられる。そしてこのスキーマは条件文そのものには含まれない形容詞rapideが意味するものである。つまり馬喰は客がこの条件文をle cheval est rapideと解釈することを期待しているのである。一方、客の視点からは同じ条件文が論証連鎖*vous serez à six heures et demie à Presbourg donc vous ferez ceci ou cela*を喚起する。これは例えばスキーマÊTRE À X DC ACTIVITÉ PROPRE À Xを具体化したものであり、このスキーマは動詞êtreによって予示されるものである。

概念照応

指示形容詞つきの名詞句をテクスト内で解釈する場合に提起される問題につい

て、Kida (2016) は論証スキーマを用いて解決することを提案している。以下ではその主要な論点を紹介する。

テクスト内のある表現（例えば代名詞 il）を理解する際に、同一テクスト内の別の表現（例えば名詞句 un homme）を参照する場合がある。このような事象を「照応」と呼ぶ。当該表現に対して参照される表現が前にある場合は「前方照応 anaphore」と呼ばれ、後ろにある場合は「後方照応 cataphore」と呼ばれる。以下では議論を前方照応に限定し、これを省略的に「照応」と呼ぶことにする。当該表現を「照応詞」と呼び、参照される表現を「先行詞」と呼ぶ。照応詞の代表的なものは代名詞（il, cela）、定冠詞つきの名詞句（le livre）、指示形容詞つきの名詞句（ce livre）などである。

一般的な照応では先行詞は名詞句であることが多いが、そうではない場合もある。例えば Pierre est tombé malade「ピエールが病気になった」を先行詞とし、照応詞 cette nouvelle「この知らせ」が解釈されるような場合である。このようなケースを「概念照応 anaphore conceptuelle」と呼ぶ。概念照応において、照応詞に先行するテクストの関与する部分はさまざまである。前述の cette information の例のように一文の全体が関与する場合もあれば、さらに広い範囲のテクストの断片が関与する場合もある。

概念照応の照応詞の解釈は、先行テクストとの関係でどのように構築されるだろうか。この問題は、照応詞の名詞句の主要部である名詞の語彙的意味と先行テクストの解釈の関係として一般化できる。Kida (2016) はこの問題に対し、主要部の名詞の論証スキーマが重要な役割を担うと主張している。

以下の例はデュマの『赤い館の騎士』からの引用である。ジラール神父はコンシェルジュリーに呼び出されている（囚われのマリー・アントワネットに接見するため）。神父に会いたいという若者が登場する（マリー・アントワネットの救出を企む「赤い館の騎士」であることが後に判明する）。ボールド体と下線は引用者による（以下同様）。

> Sur l'invitation de son maître, dame Jacinthe se hâta de descendre par les degrés du petit jardin sur lequel ouvrait la porte d'entrée : elle tira les verrous, et un jeune homme fort pâle, fort agité, mais d'une douce et honnête physionomie, se présenta.

– M. l'abbé Girard ? dit-il.

Jacinthe examina les habits en désordre, la barbe longue et le tremblement nerveux du nouveau venu : tout cela lui sembla de fort mauvais augure.

– Citoyen, dit-elle, il n'y a point ici de monsieur ni d'abbé.

– Pardon, madame, reprit le jeune homme ; je veux dire le desservant de Saint-Landry.

Jacinthe, malgré son patriotisme, fut frappée de ce mot madame, qu'on n'eût point adressé à une impératrice ; cependant elle répondit :

– On ne peut le voir, citoyen, il dit son bréviaire.

– En ce cas, j'attendrai, répliqua le jeune homme.

– Mais, reprit dame Jacinthe, à qui **cette persistance** redonnait les mauvaises idées qu'elle avait ressenties tout d'abord, vous attendrez inutilement, citoyen, car il est appelé à la Conciergerie et va partir à l'instant même. (Dumas 2005 : 452-453)

主人の言いつけにより、ジャサントは小庭の階段を駆け下りた。その先は門まで通じていた。門を外すと、一人の青年が現れた。顔面蒼白で落ち着きがなかったが、顔つきは穏やかで真面目そうであった。

「ジラール神父様は？」と彼は言った。

ジャサントは新来の男の乱れた服装や長く伸びた髭、神経質に震える様子をじっくり眺めた。すべてが不吉な出来事の予兆に思われた。

「同志」と彼女は言った。「ここには『神父』も『様』もいませんよ」

「これは失礼しました、奥方様」と青年が続けた。「サン・ランドリーの兼任司祭という意味です」

ジャサントは、共和国への忠誠心はあったものの、この「奥方様」という言葉に強く心を動かされた。今では皇后にもこんな呼びかけをすることはないであろう。とはいうものの、彼女はこう答えた。

「会えませんよ。聖務日課のお祈りをしてます」

「では、待たせてもらいます」と青年は返答した。

「でも」とジャサントは続けた。この執拗さが先ほどの悪い予感を蘇らせていた。「待っても無駄ですよ、同志。だってあの方はコンシェルジュリーに呼び出されて、すぐにでも出かけるところですので」

名詞句cette persistance「この執拗さ」はどのように解釈できるだろうか。青年はジラール神父に会おうとしている。しかし一度は断られる。しかし「待たせてもらう」と言って会うことを諦めない。つまり「断られたにもかかわらず待ち続ける」ことが「この執拗さ」の妥当な解釈である。

この解釈の構築プロセスは次のように分析される。主要部の名詞persistanceは動詞persister「固執する、ふんばる」と派生関係にある。この動詞の語彙的意味を次の論証スキーマによって記述する。

OBSTACLE PT CONTINUER

つまり「障害があるにもかかわらず継続する」というタイプの論証連鎖で具体化されるようなスキーマである。ここでのポイントは2つある。まず「障害がある」という点。一見すると、persisterとは単にcontinuer「続ける」を強めたり繰り返したりしたものであるかのような印象を受ける。しかし実際は「続ける」ことを妨げるような要因の存在が必須である。また、「にもかかわらず」の部分（スキーマではPTに相当する）も重要である。「障害」と「継続」がそれぞれ無関係に独立した形で実現するだけではpersisterとは言えない。前者が後者の原因であるわけでもない（その場合は「障害があるから継続する」）。動詞persisterの語彙的意味の核心は、通常であれば「障害」は「継続」を妨げるであろうが、それにもかかわらず「継続」する点である。

スキーマによって記述される動詞persisterの語彙的意味が名詞persistanceでも踏襲されると考えれば、名詞句cette persistanceの解釈は先行テクストをこのスキーマに即して再構成すると仮定できる。「障害」が「断られること」、「続ける」は「待ち続けること」としてギャップとともに具体化されるのである。

確定記述

定冠詞つきの名詞句を「確定記述description définie」と呼ぶ。確定記述が個体に言及する場合、それは「指示的référentiel」に用いられていると言う。テクスト内である対象に言及する場合、固有名詞と指示的確定記述が競合する場合があ

る。その選択の問題について、Kida (2019) は指示的確定記述の論証的解釈と関連付けて論じている。以下はその概要である。部分的に新しいTBSの用語で言い換えた箇所もある。

テクスト内で固有名詞と同一指示（指示対象が同じ）関係にある指示的確定記述が用いられることがある。例えば2021年現在の時事的なテクストで、Macronと言った後にle président de la Républiqueと言い換えたりl'époux de Brigitteと言い換えたりする場合である。その理由の一つは「同じ表現を繰り返さない」という文体的なものである可能性が高い。

しかし、ある文の主語を固有名詞にする場合と指示的確定記述にする場合では文全体の解釈が異なる場合がある。この点を次の例で確認しよう。デュマの『王妃マルゴ』の一節である。カトリーヌ・ド・メディシスは、娘のマルグリットとナヴァール王アンリの結婚を解消したいと考えている。ある夜、カトリーヌは不意にマルグリットの寝室を訪れる。カトリーヌによると、アンリは今まさにこの瞬間、彼女の侍女と関係をもっているという。マルグリットはベッドのカーテンを持ち上げる。そこにはナヴァール王が眠っている。

> Marguerite permit à sa mère de contempler un instant ce tableau, qui faisait sur elle l'effet de la tête de Méduse. Puis elle laissa retomber le rideau, et, marchant sur la pointe du pied, elle revint près de Catherine, et, reprenant sa place sur sa chaise :
> « Vous disiez donc, madame ? »
> **La Florentine** chercha pendant quelques secondes à sonder cette naïveté de la jeune femme ; puis, comme si ses regards éthérés se fussent émoussés sur le calme de Marguerite :
> « Rien », dit-elle. (Dumas 1992 : 147)
> マルグリットは母親にこの情景をしばらく眺めさせた。母親はメデゥーサのような形相をしていた。マルグリットはカーテンを降ろすと、抜き足で歩きカトリーヌのそばに戻り、椅子に座り直して言った。
> 「用件は何でしたでしょうか、お母様」
> フィレンツェ女はしばらくの間、娘のこの無邪気さが一体何を意味するのか探ってみた。そして、透徹した視線がマルグリットの落ち着きによって鈍っ

たかのように、
「何でもありません」と言った。

確定記述 la Florentine の指示対象は、もちろんカトリーヌである。ここで固有名詞 Catherine を用いても指示的な意味内容には大きな変化は生じない。しかし原文のような確定記述を用いると、当該文は「カトリーヌは、フィレンツェ女であるがゆえに、娘の無邪気さの意味を探った」と解釈することが可能である。つまり主語の名詞句が述語の解釈を方向付けるのである。

Kida (2019) はこのようなテクスト解釈上の事象を次のように記述する。まず名詞 florentin「フレンツェ人」が次のスキーマを予示すると仮定する。

FLORENTIN DC RUSER

これは「フィレンツェ人は狡猾に振舞う」というタイプの論証連鎖によって実現されるようなスキーマである。フィレンツェ人は「巧妙である」「抜け目がない」「ずる賢い」というステレオタイプが付与されることがある。デュマは登場人物カトリーヌをこのような観点から造形している（彼女のために調香や占いをするルネも同様である）。

そして主語名詞句にスキーマが想定される場合、「主語と述語がそのスキーマを具体化する形で解釈される場合がある」という仮説を導入する。そのような解釈は論証連鎖によって明示化される。デュマのテクストの当該箇所の解釈は、単純化すると「フィレンツェ人であるがゆえに探った」という論証連鎖で明示できる。これは先述のスキーマを具体化したものである。ただし後半部分にはギャップが生じ、「狡猾に振舞う ruser」の具体的な特殊例として「探る sonder」が用いられる。

この記述を正当化する例を追加しておこう。Kida (2019) では扱われていないが、次の例が示唆的である。先述のデュマのテクストに先行する部分で、カトリーヌが合鍵を使ってマルグリットの寝室に忍び込んだ場面である。

Et, comme si elle eût été effrayée de cette brusque irruption dans sa chambre, Marguerite sortant de dessous les rideaux en peignoir blanc, sauta à bas du lit,

et, reconnaissant Catherine, vint, avec une surprise trop bien imitée pour que **la Florentine** elle-même n'en fût pas dupe, baiser la main de sa mère. (Dumas 1992 : 144)

そして、この唐突の来訪に怯んだかのように、マルグリットは白い夜着のままベッドのカーテンをくぐり抜け、床に飛び降りた。それがカトリーヌだとわかると、フィレンツェ女も騙されないではいないような驚きの素振りを見せ、近寄って母親の手にキスをした。

当該箇所はtrop ... pour ... の構文と否定節の組み合わせにより一種の二重否定になっているが、単純化するとla Florentine en fut dupe「フィレンツェ女が騙された」とほぼ同義である。そしてこの文は「フィレンツェ女であるにもかかわらず騙された」と解釈することができる。これは先述のスキーマFLORENTIN DC RUSERと同様、名詞florentinが予示する別のスキーマFLORENTIN PT NEG RUSERを具体化した論証連鎖と考えられる（後半部分では「狡猾に振舞わない」から「騙される」へのギャップが認められる）。

結論にかえて

ラングの事象からテクストの事象へ。それをディスクールを媒介として説明するのがTBSの特徴である。上記の記述を発展させる可能性を一つだけ指摘しておきたい。最新の研究（Carel 2019）は語彙のシステムを「論証語彙地図Carte Argumentative du Lexique」と想定する。そこでは語が「街」に見立てられ、「道路」に喩えられる論証スキーマを経由してネットワークを形成している。語から論証スキーマへ至るプロセスが「解読décodage」、論証スキーマから語へ至るプロセスが「解釈interprétation」である。条件文の(ii)のタイプや概念照応のケースは「解釈」の問題として再検討することが可能かもしれない。

参考文献

Anscombre, J.-C. et O. Ducrot. (1983) *L'Argumentation dans la langue*. *Bruxelles*, Mardaga.

Anscombre, J.-C. et O. Ducrot. (1986) Argumentativité et informativité. M. Meyer (éd.), *De la métaphysique à la rhétorique*, Bruxelles, Éditions de l'Université de Bruxelles, 79-93.

Carel, M. (2011a) *L'Entrelacement argumentatif*. Paris, Honoré Champion.

Carel, M. (2011b) Ironie et paradoxe. M. D. Vivero García (éd.), *Humour et crises sociales*. *Regards croisés France-Espagne*, Paris, L'Harmattan, 57-75.

Carel, M. (2012) Introduction, dans M. Carel (éd.), *Argumentation et Polyphonie*. *De saint Augustin à Robbe-Grillet*. Paris, L'Harmattan, 7-58.

Carel, M. (2017) Signification et argumentation, *Signo*, UNISC, vol. 42, n° 73, 2-20.

Carel, M. (2019) Interprétation et décodage argumentatif. *Signo*, UNISC, vol. 44, n° 80, 2-14.

Dumas, A. (1992) *La reine Margot*. *La dame de Monsoreau*. C. Schopp (éd.), Paris, R. Laffont, « Bouquins ».

Dumas, A. (2005) *Le chevalier de Maison-Rouge*, S. Thorel-Cailleteau (éd.), Paris, Gallimard, « Folio classique ».

Freud, S. (1988) *Le mot d'esprit et sa relation à l'inconscient*. D. Messier (tr.), Paris, Gallimard, « Folio essai ».

Kida, K. (1998) *Une sémantique non-véritative des énoncés conditionnels*. *Essai de traitement argumentatif*. Thèse de doctorat, Paris, EHESS.

Kida, K. (2016) L'anaphore conceptuelle au prisme de la « théorie des blocs sémantiques ». *Discours*, 16.

Kida, K. (2019) L'argumentation et les descriptions définies. *Discours*, 25.

Kida, K. (2021) La métaphore filée à la lumière de la Théorie des Blocs Sémantiques, *Corela*, 19-1.